

記念誌 「相中相高百年史」 ” 思い出の記 ” より

中学時代の思い出

中 32 回卒 渡部 嘉親 (※1)

私は中学 32 回の卒業なので入学は昭和四年である。入学定員百五十名に対し受験生は二百七名。

昭和八年、私が五年生の時に創立三十五周年の記念式典が行われたのであるから今回が百周年といえればあれから実に六十五年の歳月が経過したことになり、この間第二次大戦従軍という苦闘を経てよくぞここまで来れたものと感慨ひとしおのものがあり、此の際我々が在学した昭和初期の古き良き中学時代の思い出を社会情勢の推移をまじえながら書き残しておくのも意義のないことではないと思う。

当時名門相馬中学に入学するという事は最高の誇りであり相馬郡内はもとより宮城県からの入学生も少なくはなかった。併し当時の村の小学校では卒業すると工場や商店に働きに出るのが一般の風習であり中学に進学出来るのは毎年一、二名というのが実情であり、私も石神二小の出身であるが共に進学したのは二名であった。

昭和五年には史上有名な世界大恐慌によって物価の大暴落がおこり、特に農家経済の支えであった米は半値、まゆは 1/3 以下に下落してしまった。失業者は全国にあふれ大学を卒業しても職はなく「大学は出たけれど」というのが流行語になったのも此の頃である。月給二十八円で小学校の代用教員になれば最高の幸運者であった時代である。

中学の冬の制服代が五円から半値になったのは結構であったが農産物の下落による農家の窮乏は甚しく毎月四円（他に校友会費、修学旅行積立金各五十銭で合計五円）の授業料が納められず折角入学したのに中途退学を余儀なくされる人々も出て来たのである。かかる時代背景の中に我々昭和ひとけた時代の中学生生活が展開した。

昭和六年九月の満州事変勃発、昭和七年五月五・一五事件発生と世の中は次第にきな臭くなって来たがそれでも制服がカーキ色になるとかゲートルを巻いて登校するといった軍国調の波が直接我々中学の生活に及ぶことはなく卒業を迎えることが出来たのである。

その代り卒業後に第二次大戦の被害を最大限に受けたのが我々の世代であり同級生の中から多くの戦死者を出したのである。

…………… 中略 ……………

当時の生徒心得の中に「飲食店劇場若クハ客席ニ入ルベカラズ」という一条があった。併し映画（当時は活動といった）については各学期の臨時試験、本試験が終わった日の午後中村座（当時日活の特約館で毎週二本建の上映がある）で必ず見学が許された。入学した最初に見たのが菊池寛原作の「結婚二重奏」であり、勿論ストーリーなど何も分からなかったが、主演女優が夏川静江であり女優さんというのは何ときれいな人であるかと感心したことを覚えている。

その他クラブ活動や運動会など思い出は尽きないが最後に創立三十五周年記念事業として建設された講堂について触れておきたい。お向かいの相馬高女には立派な講堂があるのに我々にはそれが無い。何としても講堂がほしいというのが長い間の悲願であった。それが昭和八年秋に遂に実現したのである。

在校生代表として祝辞を読んだ私の感激は今も忘れることが出来ない。しかもその祝辞が高野藤三先生がまとめられた講堂建設関係の資料のひとつとして現在の校長室に保存されていることは誠に嬉しい限りである。その講堂が建設以来半世紀を経て外壁等がボロボロになり一度は取壊しの話になったが同窓生の皆様のご協力によって立派に修復されて現在も昔のままの姿をとどめていることは当時の関係者の一人として何よりも有難く思う次第である。

(※1) 昭和9 (1934) 年卒 石神出身